



Title	ペルシア語語彙索引の作成について
Author(s)	勝藤, 猛
Citation	大阪外国語大学学報. 1975, 33, p. 41-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80539
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ペルシア語彙索引の作成について

勝 藤 猛

A Concordance of Persian Vocabulary

Takeshi KATSUFUJI

فهرست لغات فارسی

نویسنده : تاکشی کاتسوفوجی

در مطالعهٔ زبان فارسی فرهنگهای مفید و پرسود در دسترس ما قرار دارد اما برای درك معنى دقیق هر لغت یا درست بکار بردن آن به نوع دیگری از فرهنگ احتیاج داریم . بدین جهت عده ای از بخش فارسی به تألیف فرهنگ جدیدی اقدام کرده ایم .

ما اول از کتابهای ابتدائی فارسی لغات مورد نیاز را انتخاب کرده و روی ورق جداگانه آنها را با جمله هائی که از آن لغت تشکیل یافته می نویسیم . بعد از آن این ورقه ها را به ترتیب الفبا تنظیم میکنیم . با استفاده از این فهرست ما خارجیان می توانیم فارسی معاصر ایران را بهتر درك نموده و بیشتر مورد استفاده قرار دهیم .

بطور مثال این دو لغت ملاحظه می شود :

دوست داشتن
سارا توت دوست دارد .
کتاب اول - صفحه ۲۴

دارا
... انار دارد .
کتاب اول - صفحه ۱۸

I 目的

ペルシア語を学ぶ場合、たいいてい現代イランのそれから出発するから、ここでは一応、現代イ

ランのペルシア語だけを問題にする。このペルシア語を学ぶために最低限度必要な工具として辞書と文法書を座右におかねばならない。

辞書として次のものがある。

- (1) Haïm, S. : *The Shorter Persian-English Dictionary*, Teheran, 1958. 語彙 3 万語
- (2) Haïm, S. : *The One Volume Persian-English Dictionary*, Teheran, 1961. 4 万 5 千語
- (3) Haïm, S. : *New Persian-English Dictionary*, 2 vols., Teheran, 1962. 5 万語

これらの中では(1)がもっとも使いやすい。発音が示されていない不便さはあるが、小型で携帯に便であるし、語彙の点でも(2)(3)に比べて不足を感じないで、口語的語彙においてはむしろすぐれている。なお日本の印刷製本技術をもってすれば、これらの辞書はより小型により堅牢に作る事ができよう。

(4) Steingass, F. J. : *A Comprehensive Persian-English Dictionary*, London, 1892. は現代イランのペルシア語を読むには鶏を割くに牛刀をもってする感がある。

文法書として英語によるものが使いやすいという点で選ぶなら次のふたつがある。

- (1) Elwell-Sutton, L. P. : *Elementary Persian Grammar*, Cambridge U. P., 1963.
- (2) Lambton, A. K. S. : *Persian Grammar*, Cambridge U. P., 1953.

(1)は初学者に有益であり、ある程度ペルシア語を習ってから自分の知識を整理するには(2)がよい。

どの言語においてもそうであるように、何冊かの辞書や文法書を手もとにおき、いかにそれを有効に使用したところで、言語現象という無限に広い対象のほんの一部を説明できるにすぎない。必要なことは、ひたすらに読み書き会話という言語体験をふやしていくことである。ただ辞書や文法書というものはこの混沌として広大な現象をある程度法則化して我々の理解を助けてくれる。既刊の書物がこうしたある程度の役割を演じてきたのであれば、我々もまた従来の成果にいささか附加するところがあるかもしれない。

大阪外大ペルシア語学科の関係者はこの点において権利と責任を感じなければならない。なぜならペルシア語学科の看板を掲げており、ペルシア語のわかる人がつねに集まることができるのは、わが国ではここをおいてないからである。我々は昭和48年4月からペルシア語語彙索引作成の共同作業を続けてきている。こういうやや機械的な仕事は、個人よりも少数の集団の方がはるかに能率的である。

使用する材料としてイランの小学ペルシア語教科書（もちろん国定である）を選んだが、これには異論なからう。ペルシア語はイラン国だけのものではないけれども、ペルシア語圏のなかで人口が多く出版も盛んであるという点で、同国を中心においてよい。また教科書の文章は新聞雑誌や小説のそれに比べて、国民の標準的模範的文章と認められる。

この我々の共同作業の何よりの収穫は、わかりきっていると思っていた初歩的ペルシア文をもういちどていねいに読むことによって、問題点を発見して論じ合うことにある。既出の用例を誰

かが記憶していることが共同作業の有難さである。そこで出てきた問題の中には、イランの一般人も国語学者も十分に説明できないものがありはしないかと思う。

問題は大きくふたつに分類することができる。そのひとつは受容の方向である。つまりこの語句はどんな意味かということである。例えば daryā-ye-ābi(2年106頁、以下Ⅱ、106と表す)という句がある。daryā は「海」、ābi は「水」の形容詞で「水の」「水色の」の意であり、この句は「水の海」か「水色の海」か、どちらにしてもおかしい。「水の海」という表現はありえないことでなく、「川」のことを nahr-e-āb(水の川)という。ただしこの「水」は名詞である(Ⅱ、173)。

またハイキングに行くのに食べ物を qāblame というトルコ語名の容器に kashidan(引く)する(Ⅱ、150)というのはどういうことか。この容器の何たるかは、辞書を引けばおおよそわかるし、実物を見ればもっとはっきりする。kashidan とはおそらく「弁当箱につめる」の「つめる」に当るのだろうが、辞書にはこの意味は見えない。以上 ābi, qāblame, kashidan などの語は我々の語彙集に取っておくことにする。

次は表現の方向である。意味としてはわかっていても、日本語や英語にない表現で、ペルシア文を綴るに当たって注意すべき問題である。受容の方向は辞書であり、表現の方向は文法である。あるいは前者を語学、後者を文学ということもできよう。例えば日本語で「雨の中」に立つといい、英語でも in the rain というところを、ペルシア語では「雨の下」zir-e-bārān という(Ⅱ、86)。ペルシア語の諺にも、小さな困難を避けてもっと大きな困難に遭うことを「雨漏りから逃げて雨の下に坐る」という。これを「雨の中」dar bārān といっただけいけないのか、あるいはそういうと別の意味になるのか。これを問題として zir という前置詞をカードに取る。この「の下」という前置詞が「雨」に支配されている、即ち雨は上から降ってくるものだから「雨の下」としか言えないのかもしれないと考えるならば、「雨」の語をも取るべきだろう。

また khānom-e-āmūzgār という語がある(Ⅱ、5)。khānom はモンゴル語 qatun から来たもので女性に対する敬称である。āmūzgār は「先生」。この句はここでは小学校の「女の先生」のことである。ここで khānom を附けなくてもいいけれども、附けてあるのは敬称でもあるし、性別を示すためともいえる。イラン人は自分の名前を言うのに性別を明らかにする必要があるれば、男なら āqā-ye……、女なら khānom-e…… という。この āqā もまたモンゴル語の兄や家長に対する敬称に由来する。それでこの khānom を称号の使用法の一例としてカードに取る。

また「先生」をここでも、この教科書のほとんどのところでも āmūzgār としてあるが、一般にはアラビア語の mo'allim が用いられる。ペルシア語たる前者は、アラビア語よりもペルシア語を使おうとするイラン国政府の意欲の表れである。教科書というものの性質上、その内容が當為に傾き、日常会話にうかがわれる実在との間に多少の懸隔が生ずるのはやむをえない。我々はこの点を考慮に入れなければならない。

会読や語彙索引作製はわが国では支那学においてよき伝統をもっている。西アジア研究がそこ

から学ぶ点が少なくない。

II 方 法

イランの小学ペルシア語教科書には毎年すこしずつ改訂が加えられ、不動の決定版ができそうにない。したがって我々は手もとにある最新版、イラン暦1349（西暦1970—71）年版を用いることにする。

さてその1年用をもって毎週1度集まって語彙採集の作業を始める。そこでまず問題になるのは、受容の方向で取るか、表現の方向で取るかということである。前者なら文章の中から語句を拾い出すだけである。しかしもし後者であれば文法的範疇によって取らねばならぬ。例えば先に挙げた例「雨の下に」であれば、「前置詞」またはさらに小さく分けて「場所の前置詞」として *zir* を取ることになる。また *khānom* は「称号」という項目に入ればよいであろうか。

結局、作業の手始めとして完全な文法的範疇を設定することは困難なので、受容の面を優先させることにした。したがって文章の中から語句を拾い出すだけでよい。

使用するカードは図書カードの大きさ、それに黒色のボールペンで書きこむ。右上にとるべき語彙、その下にその語彙を含む文章、左下に学年と頁数を入れる。なお左上に文法的範疇を記入する箇所を設けてある。記入するのはペルシア語だけで、ローマ字転写も日本語訳もつけない。

語彙採集の原則は次のとおりである。

詩は対象から除外する。詩は1年の末から表れ、学年とともにふえるが、詩の語法は散文と相違することがあり、今は散文だけを問題とする。

古典散文は4年から出てくるが、これも対象とせず、現代文に限ることとする。

「エザーフェ」 *-e-* はペルシア語ではきわめて重要な音であるが、それはほとんどの場合、文字に表れないため、その所在を確認しにくく、したがって取りにくい。だからこれを取らないことにする。エザーフェについては独立した研究を必要とする。

固有名詞は最初に出たところだけで取る。

複数名詞語尾 *-ān* と *-hā* は全部とる。

縮小語尾 *-ak* はとる。例：*dokhtar-ak*（小娘）、*Hasan-ak*（ハサンちゃん）。

音か意味の似た語を並べた名詞句は、それぞれの名詞と名詞句全体と、合計3箇所にとる。例：*del o jān*（心と命）、*gard o khāk*（埃と土）、*kār o kūshesh*（仕事と努力）。

人称接尾代名詞は一括して文法的範疇として扱うのが便利であるが、全体の方針に従って文章に出ているとおりで取る。例：*-am*、*-at*、*-ash*……

再帰代名詞 *khod* は取る。

形容詞の比較級と最上級は原級で出す。ただし最上級＋エザーフェ＋複数名詞（…のうちでもっとも～のもの）の場合は、最上級の語尾 *-tarīn* を取る。

色を表す形容詞は取る。色のもつ文学的雰囲気（例：「秋の黄色い日ざし」）や色の象徴的意義

を知るためである。

前置詞＋名詞で副詞句となるものは、前置詞と名詞とで取る。例：be sor‘at (速く), bā ta‘jjob (驚いて)。

同じ語をふたつ並べる副詞句のうち, kam kam (少しずつ), yeki yeki (ひとつずつ) は 2 語ともに, また daste daste (三々五々), āheste āheste (そろそろ) は 1 語だけ取る。後者の方が 1 語としての独立性が高いからである。

擬声語はくりかえしもそのまま取る。例：k^hesh k^hesh (落ち葉の音, カサコソ), mā mā (牛の鳴き声, モーモー)

前置詞の意味と用法は重要なのでなるべく多く取る。

後置詞 -rā も重要なので取る。

動詞は必要に応じて取り, すべて不定形で出す。人称・時制・肯否定などを区別しない。

受動は能動に直す。例：zade shodan (打たれる) は zadan (打つ) で出す。

使役形はそのまま取る。例：sūzāndan (燃やす) で取り, sūkhtan (燃える) としない。

複合動詞で複合の仕方が緊密なものは複合のまま取る。例：bāzi kardan (遊ぶ), dūst dāshtan (好む)。

そうでないものは非動詞部分だけ取る。例：「雪が降って地面を白くする」sefid kardan. これは sefid (白い) がわかれば, 「白くする」も「白くなる」もわかるからである。ただ sefid kardan には「壁塗りをする」という意味もあり, その用法の場合は複合のままで取る方がよいであろう。

条件の接続詞 agar (もし) を取る。そうすればこれから条件文を求めることができる。

接続詞 ke はその用法が複雑なので, わかりきったものを除きなるべく取る。

次のような接続句は下線の語で取る。

har jā ke (……するところはどこでも)

har che (……すればするほど, ……なものは何でも, いくら……しても)

hamin ke (……するやいなや)

vaqt-i ke (……するとき)

何度も出てくる語をそのたびに取るかどうかは, その語について判断する。例えば「パン」「金曜日」「行く」などは 1 度とれば充分であるが, 抽象名詞・形容詞・前置詞などは用例が多いほどその意味をとらえやすいから多く取ることにする。

このようにして 48 年度に教科書 1・2 年を終え, 語彙カード約 3,100 枚を得た。49 年度は 3 年用が進行中である。それが終わればカードは 5,000 枚ほどに達する予定である。そのあと, さらに 4 年用に進むか, または他の教科書, 例えば社会科教科書に移るか, または教科書以外の材料を選ぶか, 将来の討議決定に俟つ。

Ⅲ 成 果

今までに得た 3 千余枚のカードを使っていくつかの問題を挙げて考察しよう。

Dārā az bāzār mikh kharid. ダーラー (男の名) はバーザール (市場) から釘を買いました (I, 41)

このところを日本人は、おそらく英語国民も、「バーザールで」dar bāzār というにちがいない。そしてもし場所ではなく人であるなら、「だれそれから」とするにちがいない。しかしペルシア語ではいずれにせよ「買う」kharidan とは物品の移動であるから、その移動の原点を示すのに前置詞として「から」az をとると考えるべきであろう。

では次の「から」はどうか。「この小麦粉は何から作られたのですか」「小麦からです」「このパンは何から作られたのですか」「小麦粉からです」(II, 56—57) これらの「から」は質の変化を示すものと考えられる。

「コウキャブ・ハーノム (婦人の名) は毎日、牛乳から何かを作ります。時にはそれにチーズの種を入れてチーズを作ります。時にはヨーグルトの種を入れてヨーグルトを作ります。そしてヨーグルトからバターを作ります」(II, 42) ここの「から」も同じである。その少し後に「コウキャブ・ハーノムは卵と油で目玉焼を作ります」とあり、ここの「で」bā は質が変わらない場合の材料を示すものと思われる。

「蚕は自分の体のまわりにできる細い糸で家を作ります」(II, 94) も同様である。

しかし同じく蚕の話の続きで「繭はそれぞれ 1 本の長い糸です。この糸から絹糸を紡ぎ、その絹糸から絹織物を織ります」(II, 95)とあり、ここの「から」はいかがであろうか。ここは「で」の方がよいように思われるが、この点は書き手の主観に任されているのかもしれない。

なお「ヨーグルトを作る」をペルシア語で māst bastan (ヨーグルトに固める) という。また「バターを作る」は kare gereftan (バターを取る) という。ヨーグルトを器に入れて攪拌し、上に浮いた乳脂肪分を取り出す作業から来ているのであろう。こういう分野での日本語の語彙はペルシア語や英語に比べて貧弱である。

次に「美しい」の形容詞として zibā と qashang のふたつあり、意味の差はほとんどないように思われるが、念のために用例を拾うと次のようである。

zibā: イラン国旗, 蝶の羽, 虹。

qashang: 年賀状, ボール, 服, パンジーの花。

また sir というのは「満腹した」という意味である。先に出たコウキャブ・ハーノムはよく気のつく婦人で、よその村から突然やってきた客のために、目玉焼を作り、それにパンやバター、ヨーグルト、チーズをそえてもてなす。出された食べ物が大変おいしかったので、客のひとりが言う。Az kh^w ordan-e-in nān o kare o nimrū sir ne-mishavam (II, 42) 「このパンやバターや目玉焼を食べても私は満腹しません」つまりとてもおいしいのでいくらでも食べられると

いうことである。

では次の文中の sir はどうか。イランでは年末最後の水曜の晩（日本流には火曜の晩）に枯草を点々と積み、火をつけてその上を跳ぶ習慣がある。これをチャハールシャンベ・スーリーという。これを見ている少女がいう。「枯草が燃えるのを見て私は sir にならない」この「sir にならない」は「飽きない」と訳すべきである。そして先の客の言も「いくら食べても飽きない」という意味である。また映画「ザ・サウンド・オブ・ミュージック」に出てくる「ドレミの歌」で「シ」のところをペルシア語では Si:sir-am dige(<digar) az tō. という。これは「わたしやおまえにもう飽いた」ということであろう。

客として人の御馳走にあずかっているとき、「これはおいしいから、いくら食べても食べ飽きない」などというとき、果てしなく食べさせられる。そんなときは sir shodam. といえよ。それは「私はお腹一杯になりました」という意味で、相手もそう受け取ってくれる。「もう飽いた」という悪い意味に取られることはない。

次に名詞の単数・複数の用法について述べる。「サーラーとダーラーのおとうさんは彼らのために服を買います」(I, 58)における「服」lebās は単数形である。ここでは買うものが玩具や食べ物でなく服であるということで、服という種類を問題にしているからであろう。

一方「[新学年の最初の日に]子供たちはきれいな服を着て学校へ行き、互いに話をしていました」(II, 5)における「服」は複数形である。ここではおそらく、子供たちがめいめい違う服を着ているので、複数という意識が書き手に働いたのでであろう。

次に「目」cheshm について、やはり新学年の最初の日に、都会の学校へ転校してきたイーラジという少年について「大通りでは車や人の往来がイーラジの目をくらませました」(II, 5)とある「目」は単数である。

一方「狐と雄鶏」という話があり、雄鶏は狐のおだてにのって「目を閉じて」羽ばたきをし、声高く歌う。その瞬間に狐は雄鶏にとびかかって捕える。そこへ狐が恐れる犬が来る。雄鶏が狐に教える。「“この雄鶏はおまえの村から取ったのでない、と犬に言え」と。狐がそう言おうと口を開いたとたん、雄鶏は狐の口から逃げ出す、という筋である。この「目」は複数である。片目でなく両目を閉じたという意味であろう。なおこの話はイランの古い民話集『マルズバーン・ナーメ』に見える。

もうひとつ民話を紹介しよう(II, 116-118)「ウズラと農夫」というもので、わが国でもある選挙管理委員会が、他人をあてにせずみずから政治に参加しなければならないという教訓としてポスターに載せていた話である。出典未詳。

ウズラの一家が麦畑に巣を作って住んでいる。ある日、子供が帰ってきて両親に告げる。麦畑の持主が子供を隣人たちのところへつかわし、明日麦を刈るように頼んだとのことである。この知らせを聞いてウズラの母親は言う。「心配しなさんな。明日は誰も刈りに来ないでしょう na-kh^w āhad āmad. そして私たちの巣が壊れたりしないでしょ na-kh^w āhad shod」

翌日、農夫とその子は待っていたが誰も来なかった。そこで農夫は子供を親戚のところへやって明日手伝いに来よう頼んだ。このことを子供から聞いたウズラの母親がいう。「心配しなさんな。明日も誰も来ないでしょう。私たちの巣はちやんと残っているでしょう」

親戚の者も手伝いに来なかった。そこで農夫は息子に言った。「もうこれ以上ひとをあてにすべきでない。鎌を研いで、明日は自分たちだけで麦を刈るぞ derou mikoním」

ウズラの母はこのことを知って言った。「もうここには居られない。明日私たちの巣は壊される。急いで他の巣へ移ることを考えよう」そして子供たちに教訓を与える。農夫が人をあてにしている間は私たちに危険はなかったが、自分でやると決めたからには、もうここには居られないとわかったのだと。

下線の部分、意味はすべて未来のことであるが、「来ないでしょう」「しないでしょう」「残っているでしょう」は未来形、「刈るぞ」「壊される」は現在形で、それぞれ表されている。

ペルシア語では未来形はあまり用いられない。現在形が未来をも表すからで、とくに口語においてそうである。筆者の経験でも、日常会話で未来形を聞くことはまれである。唯一の例外は1972年に会見したイラン内務次官で、盛んに未来形を使ったのは文語的文体で会話の権威を高めようとしたものであろう。

1・2年教科書の中から未来形の用例を拾うと次のとおりである。

校長先生の話として「我々は6月16日(10月8日)にメフレガン祭(秋祭)を開催するであろう。各クラスはめいめいの計画をもつであろう」(Ⅱ, 12)

2羽のアヒルと1匹の亀と一緒に空を飛ぶことを考え、棒の両端をアヒルがくわえ、亀が真中をくわえ、アヒルが羽ばたいて飛び上ることにして、アヒルが言う。「このようにすれば私たち3人とも空を飛ぶでしょう」(Ⅱ, 168)

現在形で未来を表す例を示せば、「来年、私たちは2年生に進級します」(Ⅰ, 104)

「もしこれらの新しい歯(永久歯)がくさって抜けると、もうそこには歯が生えてきません」(Ⅱ, 46)

校長先生の使った未来形は格調の高さを示すものであり、アヒルの使ったそれは少々不安を含む強い決意を表すものといえよう。またウズラの母が最初に未来形を使ったのは、不安を打ち消す感情的高ぶりからであり、次に現在形にしたのは、危険が現実の問題となったことによる冷静さの表れであろう。

また「散る木の葉」という課の末尾の文章「冬の雪がとけて春が来ますと、木々は再び目を覚まします。それからあなたがたはまた緑の若枝をその上に見るでしょう」(Ⅱ, 52)において、前の下線の箇所は現在形、後の未来形である。この未来形は一課のしめくくりとして気分を高揚させるためであろう。

ペルシア語未来形についてはそのための独立した研究が期待される。従来の文法書の説明では不十分である。

ただし文法書というとき、西洋人によるものだけでは充分といえない。現地人によるそれをも参照すべきである。それはアラビア語文法にのっとり、*ṣarf*（語形論）と *naḥv*（統語論）とから成るが、しだいに西洋言語学の影響をも受けてきている。

IV 附 論

語彙索引作製は現在なお進行中であり、これが一段落してのち、この索引を用いてペルシア語学についての基礎的研究がなされることを期待している。

ここではこの仕事の副産物として浮かんできた問題をいくつか指摘しておきたい。それはペルシア語教科書に表れたイラン民族精神の問題である。

3年の第1課に次の文がある。

「神よ願わくは、正しい考え、正しい物言い、正しい行いをなすべく、私を助け給わんことを」
ここの「神」はいうまでもなくイランが国教とするイスラム教の神アッラーのことであるが、「正しい考え、正しい物言い、正しい行い」は古代イランの宗教であるゾロアスター教の根本道徳である。こういうところにイラン的伝統を尊重しようとする政府の意図がうかがわれる。

次に、3年までに出てくる男の人名を拾って分けると次のようになる。

ペルシア語 14 アラビア語 11

ペルシア語名14のうち9までは、叙事詩『シャー・ナーメ』（列王紀伝）に出てくる人物で、次の人たちである。Kayūmars, Hūshang, Jamshid, Fereidūn, Īraj, Manūchehr, Sohrāb, Bizhan, Dārā. もっとも有名な人物 Rostam はまだ出てこない。

現実のイラン人の名前はどうかというと、筆者のシーラーズでの知人についてみるに、ペルシア語名12, アラビア語名24である。教科書にペルシア語名の方が多く出てくるのは、これも政府の政策であろう。

次に、採用されている古典についてみるに、そのほとんどがシャー・ナーメである。このことを同じペルシア語国であるアフガニスタンについてみるに、その小学校ペルシア語教科書に採用された古典として、シャー・ナーメはなく、主として『ゴレスターン』（ばら園）である。シャー・ナーメがイラン民族主義の表現であるのに対し、ゴレスターンはより広く、イスラム教・ペルシア語的文化圏に共通の古典として、インドなどでも愛読されてきたものである。

アフガニスタンとてシャー・ナーメに決して無縁ではない。それが編まれたのはその中のガズニーを都とするガズニー朝の下においてであるし、シャー・ナーメの人物の名をもつ遺跡がいくつかある。例えばハイバク（旧名はシャー・ナーメに出てくるサマンガーン。イランの英雄ロスタムがここで妻タフミーネを得て、ソフラブを生んだ）の郊外にある仏教遺跡が「ロスタムの王座」（1960年に京都大学が調査）、パルフ附近に多いテペ（遺丘）のひとつが「ロスタムの丘」、バーミアーンにある城址が「ゾッハークの町」、フェラーにある都市址が「フェレイドゥーンの町」など。

しかしながらアフガニスタンはイランほど強い固有の文化をもたず、その国教も、イランがシーア派であるのに対して、正統派たるスンニー派である。人名についてみてもイランとは相違し、ほとんどアラビア語で、少々のパシュトゥー語がまじっている。ペルシア語名はきわめてわずかである。

以上のことはイランとアフガニスタンとの比較文化研究のひとつの材料となろう。